

ルネ・デカルトの懐疑：『省察録』におけるデカルトの自覚（西洋哲学史研究第一篇） その一

瀧澤，克己

<https://doi.org/10.15017/2544333>

出版情報：哲学年報. 5, pp.1-21, 1946-06-05. 九州帝国大学法文学部
バージョン：
権利関係：



ルネ・デカルトの懷疑

——『省察錄』におけるデカルトの自覺

(西洋近世哲學史研究 第一篇) その一——

瀧澤克巳

目次

序 自然の光明	一
一、覺醒と懷疑	二
イ、時代	
ロ、方法と懷疑	
ハ、暫定的道德	
二、『省察錄』におけるデカルトの懷疑	八
イ、第一省察の核心	
ロ、デカルトの懷疑と懷疑主義（デカルトにおける理論と實踐）	
ハ、デカルトの懷疑の不徹底	
三、結びと見とほし	一九

序 自然の光明

「婦女子もその中に何ものかを理解することができ、また最も鋭い人々も彼らの注意を用ふべき十分の問題を見出すことができるやうに……」(一六三八・二・二二、ヴァチエ神父宛書簡)

——世の最も愚かな者にもこの上なく親しいもの、しかしまたいかに賢い者もそれに狎れる事を決して許されないもの。この世界の最も力ある者と力なき者とを直ちに一たらしめるもの。そこからは凡ての異常なものが日常のものとなり、如何にありふれたものも限らない神秘を現はすもの。或は又、あらゆる絶望の底に私を支へ、この世ならぬ幸福のさなかに私を慎ませるもの。——かくの如きが、ラ・フレーシュの學校以來デカルト(René Descartes 1596—1649)の求めてやまない「眞理」であつた。齡十九才の彼をして、「ヨーロッパ第一の學校」を去つてあまねく國々を歴めぐる事を決意せしめ(一六二四)、病弱の身を以て敢て三たび軍隊に投ぜしめ、冬の宿營にあつて「驚くべき學問の基礎を發見」せしめ(一六一九・二・二〇)、華やかな祖國の首都パリを逃れてオランダに隠れ棲ましめ(一六二八)、つひに「熊の國、岩と氷の間」にその骨を埋めしめた(スエーデン、一六四九・二・一一)——絶對の呼び聲であつた。

デカルトが「理性」la raison と云ひ、「良識」le bon sens と呼び、「自然の光」la lumière naturelle と稱くるものを正しく理解するには、何よりもまづ哲學史家の解説や批評を去つて、デカルト自身の語るところ、例へばかの『方法叙説』Discours de la Méthode……1637《に要約されたやうな彼の思想的經歷を、注意深く辿ることによつて、極めて平明な彼の文章を一貫する、不敵なつら、魂を見て取らなくてはならない。

一、覺醒と懷疑

イ、時 代

西洋の近代精神は人間が自己自身において絶對の呼び聲を聞くことから始まつた。我々は「たゞ信仰によつて」といふルッター（二四八三—一五四六）の叫びにおいて、人間のかういふ自覺の最初の明かな現はれを聴く。しかしルッターにおいてそれはなほ、「たゞキリストによつて」、「たゞ聖書によつて」のみ可能にせられる一つの特權であつた。人がこの制約を脱して絶對の自由を求めた時、人はそのあらゆる聰明と誠實とを以てして、なほ單なる放漫と權謀術數への傾きを免れることができなかった（ブルーノー「一五四八—一六〇〇」、マキアヴェリ「一四六九—一五二七」を見よ。中世末期の僧侶が放縱、陰險、加ふるに迷信的でなかつたといふのではない。しかし彼らは少くも、その放縱と陰險とを自由と現實性の名のもとに誇らうとはしなかつた）。

新しい技術と嚴密な科學とは、すべてを支配せむことを求めてたゞ運命の奴隸となり、一切を知らむことを欲して永久に無知の中をさまよふこのやうな人間に對する、自然そのものの恵みに満ちた鍛鍊であつた。「自然はたゞ之に順ふことによつてのみ打ち克たれる」*Natura parendo vincitur*に始まるフランシス・ペイコン（一五六—一六二六）の『新論理學』*Novum Organum*は、もともと人がそこに住むところの自然そのものに還ることによつて、かういふ慎みとのぞみとを體得した自覺的人間の最も力強い呼び聲であつたと云ふことができる。

ロ、方法と懷疑

書物によるのではなく、世の習慣によるのではなく、「たゞ自己自身の理性によつて」——一六一九年十一月十日、デカルトがその屯營で發見したといふ「驚くべき學問の基礎」を、我々は後の『方法叙説』にしたがつて一應かう要約してさしつかへないであらう。しかしその同じ『方法叙説』は、その時突如として彼の全身に溢れて來た歡喜の情にもかゝはらず、すべての基礎たるべき「自己自身の理性」といふものが、彼にとつては——彼を模倣する多くの青年におけると異なつて——問題の解決であるよりも、むしろ今や唯一絶對のその焦點をあらはにした問題そのものにほかならなかつた事を、何よりもはつきりと物語つてゐる。學校から社會へ、社會から軍隊へと、その日まで彼をさまよはせたデカルトの懷疑は今やうやく、彼自身の生涯をかけてこの問題と取り組まうとする——自己自身においてその生活の不動の根據を見出さなければやまないといふ——堅い決意として、それ自身を自覺したのである。

「しかし闇の中をたゞひとり歩く人のやうにそろそろ行かう……」（『方法叙説』第二部參照）

——と彼自身の云ふやうに、その心の奥底で既に書物と世間とに別れを告げたデカルトの周圍には、それまではただ朧ろげに感じられただけだつた人生の闇そのものが、もはや全くそれから眼をそらすことができないやうに、ひしひしと迫りつつある。

たゞ古人がさう教へたから、世間がさう命するから、といふのではなく、自分自身それを認めずにはゐられない事實、しかもたゞ自分一人ではなくすべての人がそれに従ふほかない眞理。——闇の中をたゞ一人歩く人が、何かの手

がかりを模索しながら一歩々々その足を運ぶやうに、デカルトはまづさし當つて、今まさにその闇の中に消えようとする從來の學問の中に、彼の志すかういふ眞實を髣髴せしめる何ものかを探し索めた。論理學と幾何學及び代數學——それが辛うじて彼の求め得た「三つの技術あるひは學問」であつた。

幼い時から習ひ覺えたこれら三つの學問を、デカルトはなほ冬の宿營にあつて、今新しく吟味する。彼自身の脚下を照らすともし灯、行く手を示す道しるべとして、これらのものを新しい彼の旅路に役立てようとする。一方、與へられた命題をその命題として確定し敷衍するのはよいとして、その命題が事實人間の歩むべき世界の道しるべとしてどれだけの意味をもつかの吟味には全く無關心な從來の論理學を棄てるとともに、他方、古代人の幾何學及び代數學の中から、與へられた問題を既にできたものとして、と云ふよりはむしろ與へられた結果を問題として、否更に適切に云へば、すべて現れるものがある條件の必然的な結果と見て、一歩々々その原因を尋ね求めて行く、しかもその原因を、自己自身又はこの世界の彼方に想像するのではなく、たゞ自己自身に直接な、この世界に内在する、單純な事實、choses simples として明晰かつ判明に clairement et distinctement 直觀 intuition する分析的方法——逆にかく直觀せられた單純な事實そのものにもと含まれてゐたものとして、この事實を云ひ表はす命題から再び嚴密に順序を追ふて俾の結果を演繹する綜合的論證を發見するために、缺くことのできない前提としての分析的方法——を彼は我がものとして選び分けた。のみならず、この分析を更に徹底せしめて、彼自身の働く世界の約束(法則)を指示するにふさはしい、具體的でしかも普遍的な一つの新しい數學(解析幾何學)を編み出した。固定した個々の圖形に極限せられ、對象の雜多な種類に眩惑せられて、いたづらに想像力と記憶力とを疲らせつゝあつた人間の悟性は今その本來

の地盤に還つて（座標系）、想像力と記憶力とを最も有効に驅使しつゝ（單純な線と記號）、その欲するものを自由に産み出すべき法則を探らうとするのである。

すべて現はれるものの必要かつ充分な發生條件を、自己において直證せられる單純な事實に至る周到な分析とそこよりする嚴密な演繹とによつて明晰かつ判明に把握すること、——そのほかに學問の正しい道（方法）のあり得ないことを彼は信じて疑はなかつた。彼の解析幾何學ないし物理學は、彼の發見したかういふ方法の眞實すなはち生産性を確信させるに足るその直接の成果であり、『精神指導の規則』*Regulae ad directionem ingenii* 1628:《はそれらの實習を通じて體得せられた、悟性のための——今や空しい安逸を棄てゝ事實の荒海を泳ぐべき悟性のための——行きとどいた指導書であつたと云ふことができる。

併しながら若しも彼がたゞそれだけのことに満足して、彼自身の研究の體驗を反省しつゝ新しい論理學を書くことにとどまつたならば、たとひ彼がその『規則』を完成したとしても、哲學者としてのデカルトは結局、フランス化されたベイコンに過ぎなかつたであらう。何故なら、彼の『規則』がベイコンの『新論理學』に比べて若干體系的に整つてゐるばかりでなく、彼の創設した解析幾何學を介して、自然科學における數學の意義を遙かに明瞭に意識してゐるとしても、他面實驗科學の方法に關する『規則』第三部の計劃にもかかはらず、彼がベイコンに反して感性的經驗を不當に貶したといふ嫌疑は、例へばその部分の主題が數學に關する同書第二部に對して「不完全な問題」といふ誤解されやすい名で呼ばれてゐる一事からしても、すつかり拭ひ去るわけにはいかないのだから。

だがデカルトにとつてこの方法はどこまでも唯、幼い日から彼の魂を搖がし、あの日突然にその焦點を明かにした

唯一絶對の問題を解くための、一つの手がかりにすぎなかつた、自己の魂はたゞ之を傳統的な教會の手に委ねて、知らず識らず權力と富と榮譽とを願ふやうになつたペイコンに反して、デカルトにとつては正に自己自身の理性が——單に自分の物をではなく自己そのものを正しく處理する方法が——どうしても必要だつた。人間の自己そのものの、世界の歴史の、分裂と衝突との根本的原因は何であるか、自己が、歴史が、國々が、ほんとうに落ちついてすこやかに伸びるための第二の條件は如何なるものか、人の生活がそこにもとづけ立ち、そこを離れれば倒れる基準はいつたに何處にあるか。——彼の發見した學問の方法にしたがつて自己そのものの道理を明晰かつ判明に認知することによつて、自己自身を自由に支配する新しい道を建設するまでは、彼の魂は安らふことができなかった。新しい論理學と解析幾何學とを獲得して、彼の懷疑はいよいよ深くなりまさるばかりだつたのである。

ハ、「暫定的道德」

人が人として心底から安んじて生きることのできる方法の創設——デカルトの志はそこにあつた。しかしかういふ方法がまだほんたうの土臺から建設されない間にも、人は一刻も生きることやめるわけにいかない。そこでデカルトはその目標に到達するまでのあひだ闇のなかの彼の歩みを導くべき、暫定的な規則を立てる。(同第三部)

第一に、いつも極端を避けてできるだけ、祖國の宗教、法律、慣習に従ふこと。

第二に、一旦それと決意した路は行ける處まで行つてみることに(その途中で、又はその終りで、他の多くの路のこゝを思つてくよくよしないこと——それは實り多き學問的思惟ではなくて、聖書にいはゆる思ひ煩ひにすぎない)。

第三に、事の成否に囚はれることなく、たゞ世界の秩序にしたがつて自己の思ひを正さうと努めること。

最後に、與へられた境遇に照し自己自身の良心にかけて、自己の擇び得る最善の仕事を擇ぶこと、——デカルトは彼の擇んだ、といふよりもむしろ彼に「與へられた仕事」——「私の理性を開發するために、自分の立てた方法にしたがつて力の限り眞理の認識へと前進するために全生涯を使ひつくす」といふその仕事の、少くとも彼にとつて、最善のものであることを確信した。

かうして「方法」の杖と「暫定的道德」*moral provisoire*のマントと、必要な二つの準備を整へたデカルトは、一切の曖昧な意見や知識から身輕になつて、冬がまだ終りをつげないうちに、再び見かつ考へるための新しい旅——前よりもつと困難な闘ひの旅——に登つたのであつた。

「だが……世に行はれる哲學に對してそれ以上に確實な哲學の基礎たるべきものを探究しはじめせぬうちに、九ヶ年の月日は流れ去つてしまつた……」(同上)

——かういふデカルトの述懐にもかゝはらず、その九ヶ年の間彼のなした觀察と思索とが、數學上物理學上の問題に關はるものをも含めて、すべて窮極の目標たるかの一點に無事に降り立つたための豫備訓練の意味をもつてゐたことは、例へば彼がその旅の途中、ガリレイの住む傍をすどほりしながら、「驚くべき學問の基礎」を發見したあの記念すべき日の誓ひのとほり、ロレットの聖母に詣でたといふ一事からも、その一端をうかがふことができると思はれる。

一、「省察録」におけるデカルトの懷疑

イ、第一省察の核心

かうしてデカルトの前半生を彼と一しよに歩いた後、我々は始めてそれから更に十二年後のデカルトが彼自身の懷疑を云ひ表はした一つの獨白——一見甚だ奇矯に見える『省察録』(Meditationes de prima philosophia... 1641) 第一章——の自然さを、一應はつきりと理解することができる。

「……で、その頃から私はしぜん、若しも私が學問の中に何か確かで永續的なものを打ち建てようとするならば、一生に一度はまじめに、曾つて私が受け容れて來たあらゆる意見を脱ぎ棄てなくてはならない、さうして全然新しく根本から始めなくてはならない、と判斷した。」

と、デカルトは云ふ。

何か確かで永續的なことがその上に打ち建てられるべき學問の基礎——それが、從來のあらゆる意見を棄てさせたデカルトの懷疑の目標であつた。しかしデカルトにとつてはもともと、「この現生で確實に歩むために、眞と僞とを識別する」(「叙説」第一部) ことのほか、學問といふものはなかつた。従つて彼にとつて右のやうな學問の基礎はすなはち又、何か確かで永續的なものがその上に打ち建てられるべき全生活の基礎でなくてはならなかつた。一言で云へば、既に前節で見たやうに、彼の思ひ、彼の言葉と行ひとが、たゞそれによつてのみ、かつそれに基づけば必ず、眞

實のものとなり得る根柢（基礎條件）に對する、彼自身どうすることもできない憧憬こそ、彼の懷疑の本質——第一省察の核心——だつたと云ふことができる。

従つてデカルトの懷疑は、彼の云ふ明晰かつ判明な直觀と同様（「規則」第四）、各々の人が自分自身に體驗することによつてのみ、それを理解することができるものだと言はなくてはならない（無論それは、このやうな懷疑が一人の人から他の人に、一つの時から他の時に傳はることができないといふのではない。むしろ全くその逆なのではあるが）。——多くの人は「一生に一度」もかういふ疑ひを起さずにしまふ。また他の多くの人々が古來の習慣や意見を棄てるのは、たちまちに又、新しい現代の流行や自分の情念に囚はれるためにすぎない。さうして少し年を取ると、曾つての自分の彷徨をたゞ若い時の氣まぐれとして片づけてしまふ。たゞわづかな人々が生涯かういふ疑ひを懷きつづける。そして更にわづかな人々だけが、この疑ひの重さをはつきりとその身に感じて、デカルトの如く慎重かつ執拗に、その探究の歩みを進める。否、當のデカルト自身さへ、この一つの事がどんなにむづかしいかを省みて、次のやうに述懐せざるを得なかつたのである。

「だがこの企ては苦しくかつ辛い。そして一種の怠惰が知らず識らずのうちに私を日常的な生活の軌道に引き入れる。——恰も眠つてゐる間虚假の自由を楽しんでゐた奴隸が、その自由がたゞの夢にすぎないかを疑ひはじめの時、はつきりと眼の覺めることを怖れて、よりながく心地よいその幻想に欺かれるためにひそかにおのが力を藉すやうに、私も亦いつの間にか私の古い意見の中に自分の方から落ち込んで、このまどろみから醒めることを懼れるのだ、——この休息の安らかさに次いで來るべき夜々の苦しい勞役が、眞理の認識において何かの日と光と

を私にもたらずどころか、結局はかくて揺り起されたまづくらな難問の闇をほのかに照らし出すにさへ足りないのではないか、と」。

それなればこそデカルトは、「生活に關する場合感覺を信じないのは、實に愚かであることを、「淵に落ち込まぬために友達に身を護つてもらはなければならなかつた」晒ふべき昔の懷疑主義者によつて例證しながら『省察錄』附錄「抗議と辯明」第五）、しかもなほ太陽や高い柱像など遠く離れたものについての感覺のみならず、自分の着物や身體など最も近いものについての感覺すらも、それも亦夢とひとしく誤り得るものとして、彼の懷疑の中に引き入れた。眼や顔や色彩など要素的な個々の部分や素材のみならず、最も單純で普遍的な數學上の知識までも確かには信ずるに足りないものとして、斥けざるを得なかつた。創り主なる神の善意を盾として被造物なる人間がそのやうにいつもかも誤ることはあり得ないと云ふ者に對しては、少くとも度々誤ることがある以上、そのやうな神の善意もにはかには信じがたいと抗辯した。否そればかりか、神の如く強力で、しかも類ひなく狡猾な欺く靈をさへ想定した。——古くからの社會的習慣と、現在の感覺の鮮やかさと、數や圖形の永久の明かさにもかゝらず彼の魂そのものを震撼することをやめない、と同時に又、それらのものゝ與へる便宜と昂奮と愉悅の故にやゝもすれば忘れられがちな、あの重大な問題を、一つの惡靈に對象化し、今までに獲たすべての意見をその詐略による全き虚偽と想定して、かの唯一の眞實を求める苦しい闘ひへの不斷の刺戟となさざるを得なかつたのである。

ロ、デカルトの懷疑と懷疑主義

(デカルトにおける理論と實踐)

デカルトの懷疑の焦點を、全人間の活動が、もしくは世界の歴史そのものが、たゞそこに基づいてのみ正しくかつ調和あるものとなり得る土臺の問題として把へる時、我々はまたおのづから、あるひは二つの相反する意見のうち一つが誤りならば他は必ず眞でなくてはならないと云ひ (Bourdin)、あるひはデカルトの敘述にむしろ哲學的な誇張を見 (Cassand)、あるひはまた十分な吟味を経ることなく從來の知識のあらゆる基礎を一概に疑はしいものとして斥けたデカルトの輕卒を咎める (E. Rabier)、世の學者たちの抗議が、結局は彼ら自身、哲學が眞に學問となるための、否一般に學問が眞に學問となり、人が眞に人となるための、第一の問題に對して如何に盲目であるかを暴露するにすぎないことを、はつきりと見てとることができる。

それとも人は、理論の問題と實踐の問題とを峻別して、彼の懷疑が公けの秩序 (學校のそれをも含めて) に對して何の危険もないものであることをくりかへし強調したデカルトの言葉を引いて、この懷疑の中に人間全體もしくは世界の歴史そのものゝ根本問題を見ようとする私の解釋の、餘りにも情意的にすぎることを咎めようとするであらうか。——なるほど、デカルトはその第一省察の終りに近く、彼の普遍的かつ徹底的な懷疑について、彼自身云ふ。

「何故と云つて、今は行爲することではなく、たゞ省察し認識することだけが問題である以上、私は、この (懷疑の) 道にどんな危険も誤謬もあり得ないこと、また今日こそは私の不信をどんなに強めても強めたりないことを

確信してゐるのだから。」

又、『哲學の原理』(Principiae philosophiae 1644)第三節には、「この疑ひは決して我々の行爲の導きとして用ひられてはならぬ」と斷言した後、更に『方法叙説』第三部の「森の中で道に迷つた旅人」の有名な譬ひに應じて、それを次のやうに敷衍してゐる。――

「しかし、私のつもりではかくも普遍的なこの疑ひの方法を用ひるのはたゞ眞理の探究に従事する時に限るのだといふことを、特に注意しておかなくてはならない。蓋し我々の生活の處理といふ點ではたゞ眞らしいと思はれる考へに従はなければならないことが甚だ多いので、世上我々の行爲を促すやうなことは、それを疑つてよく確めるやうなことをしてゐる間には、濟んでしまふのが普通である。同じことについていろいろに考へられて、その中のどれが眞らしいといふこともきまらない、といふ時、事情が遷延を許さなければ、むしろその中の一つをいち早く選び、選んだ上はそれを恰も確かなもののやうに信じて常に従つて去らぬことを、理性は奨めるのである。」

併しながらデカルトのこれらの言葉を、他のあらゆる叙述との關聯において注意深く讀む者は又おのづから、一見彼の學問の實生活からの遊離を示すこれらの言葉そのものにおいて、逆に彼の學問が彼の懷疑それ自身をも含めて如何に徹底的に人間生活の現實もしくは眞實と結びついてゐたかを聴きとるであらう。

何故なら、デカルトはいつたい何處で、我々の行爲がたゞ眞らしいといふにすぎないものによつて、云ひかへればたゞほんたうらしく思はれるところによつて、支配されることそのことを、善いこととして奨めただらうか。否彼はそのことが善いとか悪いとかいふ論議を超えて、事實上そのやうな人間の行爲がしばしば蹉跌することのあるのを知

りつくしてゐた。さうしてたゞ眞實らしく思はれるといふだけでなく事實さうあるとほりの筋道を明かに示して、人の歩みを安全に導くといふこと、たゞそれだけが一般に彼にとつて理論といふものの意義であつた。たゞ理論がこのやうにあらゆる獨斷を去つてまじめに生活の指針となることを求める時、云ひかへればたゞ人がさう認めるといふだけでなく、今此處に働く自分自身の事がらとして生きた理論とならうとした時、彼は自然へりくだつて、人間が甚だしばしばたゞ眞らしく思はれるところにしがたつて行爲するほかないものであることを、ありのまゝに且つはつきりと、しかし當然の權利の如くにはなく深い羞恥と堅い決意とを以て、告白せざるを得なかつたのである。我々はかの「暫定的道德」の設定において、デカルトのかういふ悲しみ——實は後に明かになるやうに、たゞ感謝して受けとるべき神の寛容、換言すればたゞ讃嘆して之を認めるのほかない神の睿智（たゞそれなればこそデカルトの理性は之を獎める！）——の最も切實かつ根本的な現れを見ることが出来る。

それ故に實踐もしくは日常の生活においてはしばしばたゞ眞らしいところにしたがつて決斷し、行爲することを餘儀なくされると云つた時、デカルトは彼の懷疑が實踐もしくは日常の生活に何の關はりもないと云はうとしたのではなく、むしろ唯、我々が日常それを「絕對に間違ひない」規準として生活してゐるものもろの主義や意見が、いかにしばしばたゞ眞らしく思はれるだけのものにすぎないか——頻々たる「天災地變」、さては人の世の果てしない混亂と詐略と争鬭とにおいて、我々はそのあからさまな報いを見る——を反省させて、眞に根柢ある生活へ、それを明かにするための理論的省察へ、さうして更に、依然として理論から全く獨立であるとは云へ理論の必要を心底から自覺した新しい決斷へと、世の人々を誘はうとしたのであつた。

かへりみればあの日デカルトが學校と社會を棄てて自分自身に還つた時、理論と實踐と、わたくしの生涯とおほやけの生活とは、全く新しい意味において、すなはち單に成績表と社會的地位、學校長と世の有力者とのごとくではなく、直ちに彼自身の脚下において、永久に結びついたのであつた。彼が學校と社會と軍隊を去つて彼自身の中に閉ぢこもつたのは、それらの規則を犯して私の意慾を満たすためでないことはもとより、それらの規則に抵觸しない限りにおいて「平穩無事な、清淨な生活」を楽しむためでもなく、たゞそれらすべての權威を以てしても如何ともすることのできない、否これを離れればそれらの權威がたちどころに最も惡質な私（パリサイ人の偽善）に轉化するところの、眞の公の場所に置かれてゐる彼自身を自覺したからであつた。彼がその懷疑において、實踐と理論を峻別したのは單に兩者を分離するためではなくて、むしろたゞその混同、その不徹底、従つて又その双方にたゞさはる者の狎れあひと嫉みあひとを警めるためであつた。理論をして眞に現實的に、實踐をして眞に合理的たらしめるこの公の場所において、眞に謙遜にかつ自由に語り、行ひ、闘ふ人となるためであつた。——書齋のデカルトと森の中のデカルトと、二人のデカルトがあとから一つに結びつくのではない。認識の四つの規則を發見したデカルトがすなはち懷疑するデカルトであり、懷疑するデカルトがすなはち又、「決定的道德」を志して、「かりの道德」を定めたデカルトなのである。

それなればこそデカルトは確信を以て、彼の懷疑の道は、「省察と認識とに關はるが故に全く何の危險も誤りもない」と斷言することができた。と同時に深い悲しみを以て、彼自身いかにしばしば誤りと迷ひの中に行爲しなければならぬ人間であるかを告白せずにはゐられなかつた。眞に疑ふ者、明かな認識を求める者は、また必然にこの悲し

みを知らなければならぬ。彼が「危険で誤つたもの」として厳しく斥けた「實踐に關する懷疑」とは、たゞこの悲しみを知らなくそれ自身すぐに實踐の原理であらうとする懷疑主義、換言すれば、自分自身勞苦して眞理の省察と認識とに従事することなく、たゞいたづらに人の世のあらゆる主義や慣習の「裏」を覗いて（その實彼の考へるやうな「裏」などといふものは元來何處にもありはしない、後に見る如く、それはたかだか彼自身氣づかないその人の私の反映にすぎない）、結局は自分勝手な行動の言ひ譯とする御都合主義——世のかしこき者のやゝもすれば陥りがちな怠惰と虚榮——のことにすぎないと云はなくてはならない。「理論においてはどこまでも嚴密に、實踐においてはある程度曖昧に」、あるひは又「公生活はあくまでも嚴格に、私生活はある程度自由に」——さういふ學者・軍人・政治家どものもつともらしい言ひ草ほど、徹底的な明るさを求めるデカルトの人と學問とに遠いものはないのである。

ハ、デカルトの懷疑の不徹底

以上明かにしたやうに、デカルトがその懷疑において求めたものは、自己の言葉と行ひとがたゞそれに基づいてのみ正しいものとなる土臺を、明晰かつ判明に認識することによつて、「決定的な道德」*moral definitive*を打ち建てることであつた。それは一見たゞ頭の中だけの作爲にすぎないやうに見えながら、その實は彼の魂そのものがその故郷に憧れる自然の呼び聲であつた。たゞ彼一個の私事のやうに見えながら、人が眞に人となるための確かつ平明な方法を求めるものとして、直ちに國家の興廢、人類の禍福に關する問題であつた。彼が社會改革の實踐に關してむしろ消極的であつたといふこと、例へば彼がその「自然學の諸原理」については、「萬人の幸福」に寄與し得るものとして

できるだけ早くかつ廣く之を世間に傳へなくてはならないと考へたのに反して、日常の實踐に關する規範については、敢て彼自身のものを公にすることなく、むしろ之を各人の見識に委ねることを欲したといふ事實も（「方法叙説」第六部）、彼の哲學の社會的實踐に對する無關心の證據であるよりも、むしろ社會的實踐に對する彼の關心の如何に根本的であつたかを——眞に人間を知つた哲人の謙虛な忍耐と祈りとを——證明するものと云つてよいであらう。

従つて又、普通に哲學史家の紹介するとほり、デカルトはその懷疑において疑はうとして疑ふことのできない確實な眞理を求めて、彼のそれまでに獲たすべての知識を吟味したと云つても、彼が求めたその眞理といふのは、もともと人の考へ（もしくは命題）としてのこの眞理、あの眞理——たとひそれがどんなに確實で疑ひ得ないといふ感じに伴はれてゐるとしても、否實際にそれが絶対に變らない「普遍かつ永久の眞理」であるとしても——ではなく、むしろたゞ人の言葉と考へとがたゞそれを指し示すことによつてのみ眞理となるところの、事實そのものの理路を意味する筈であつた。従つてそれは、それを表はすか表はさないかによつて人の考への眞偽が岐れて來るところの人生の場所そのものの筋道として、それに對しては人間の正しい意見も誤つた意見も同等となるべき基準でなくてはならなかつた。窮極的には、智者と愚者と、善人と惡人と、あらゆる人が到る處でそれに觸れてゐると同時に、人間の眞偽善惡が刻々にそこから岐れ定まつて來る、絶對の審判者でなくてはならない筈であつた。人間の思想と行爲とは、たゞその言葉にしたがふことによつてのみ、眞なるもの、善なるものとして他の言葉と行ひとを導く規準となることのできるのである。

デカルトの夙くから求めてやまなかつたもの、終生説いて倦まなかつたものが、このやうな事實もしくは場所その

ものの言葉としての「眞理」にほかならなかつたことは、我々が冒頭に掲げた彼の言葉を再び引くまでもなく、どこまでも自由でかつ規律ある彼の生涯、類ひなく平明でしかも高貴な彼の文體の、既に遺憾なく之を證明するところである。たゞ惜むらくは、彼の鋭敏と誠實とを以てして、デカルトはなほ、何か固定した摺まり、所なしでは済まされな
い、スコラ哲學の傳統——と云ふよりもむしろ人と神とについての西洋的な考へ方を——完全に脱却することができなかつた。と云つて私は無論、デカルトの哲學にいはゆる流動性と神秘性——例の「深淵」——の缺けてゐることを咎めようとするのではない。眞實をどこまでも明晰かつ判明に認知され得る形の中に求めたことは、現代流行の「實存哲學」その他の世紀末的なものに對して我がデカルトの古典的な所以である。たゞしかしデカルトが近代の古典たる所以は、彼がその形を時間・空間を超えた永遠の實在に求めた一般の古代哲學に反して、今此處に決定せられた事實そのものの運動法則として科學的に把へることによつて、事物の技術的處理に資しようとした點にある。従つて若しもデカルトがどこまでも本來のデカルトにとゞまることを欲するならば、自己の魂の安定（人間もしくは歴史そのものの正しい建設）といふ課題についても、徹底的にその事實的發生條件を追究することによつて、道德といふ根本的技術の導きとなすことを期すべきであつた。實際デカルトの窮極の意圖がそこにあつたことは、晩年の彼が流謫の王女エリザベスの心のいたでを癒やさうとしたものした『情念論』*Les Passions de l'Âme* 1649《、特にそれについてある人に送つた彼の手紙の最も雄辯に物語るところである。

「お送りする小論文の言葉づかひは極めて單純簡潔であつて、私の計畫が雄辯家 *orateur* としてではなく、又道德的哲學者 *philosophe moral* としてもなく、たゞ自然學者 *physician* として情念を説明するにあつた所以を理

解させるであります。」(一六四九、ピコ宛)

——彼の『省察録』がもともと、特に人間の正しい考へ(眞なる命題)といふ面に關して、同じ課題を同じ方法で追究したものであることは、我々の以下の研究を俟つまでもなく、右に詳しく述べた彼の懷疑の本質から既に明かなことであらう。それはたしかに、『規則』が眞理認識のための「暫定的な、すなはち局部的・抽象的な方法」にすぎなかつたのに對して、その「決定的な、すなはち具體的・全人格的な方法」を目指したものと云ふことができるのである。然るに、それにもかゝはらずデカルトは、その懷疑において彼の求めたものを、不注意にも、たゞ「確實で疑ひ得ない眞理」といふ曖昧な形で言ひ表はした。そしてそのやうな眞理が「今までの彼の意見の中にあるかどうか」を吟味した。恰も人間の考への中に(いはゆる「永久の眞理」をも含めて)、彼自身の自己成立の根柢たる事實そのもの——彼がそこに住む場所そのもの——の審きを超えて他を審くべき權威あるものがあり得るかの如く。

そこにデカルトの懷疑の致命的な不徹底があつた。彼自身生命の主、魂の故郷の呼び聲に耳を蔽うて、その旅の中途に安らはうとする彼の我が儘——彼自身の氣づかない「我」の働きがあつた。そこから彼の形而上學のみならず彼の哲學全體に、獨斷的形式的傾向が生じた。彼の生活そのものになほ残るかすかな偷安のかげも亦、必ずしもこのことゝ無關係ではないであらう。しかしこのやうな學問の體系は、もとより眞に人間を健やかならしめる方途を指せず、かくて獲られた平安は畢竟虛假のものなるが故に、デカルトは心ならずもかしこい、彼の學問と生活とは甚だ都合よく——宗教の眞理をたゞ單に超越的な神からの啓示として、彼自身の外に残さざるを得なかつた。例へば『自然の光明による眞理の探究』(Inquisitio Veritatis per Lumen Naturale 1640?)の始めにユウドクソスをし

てポリアンドルに云はしめたデカルトの言葉は、彼本來の意圖が明かに傳統的宗教の眞理をもその眞實の理由としての彼自身の存在の根本條件——人がそこに生れて來る場所そのものの約束——に照らして學問的に説明し吟味することによつて、眞實に自分のものとして受けかつ傳へるにあつたことをはつきりと示してゐるにもかゝらず、彼はなほ依然として信仰と神學とを、人間の知識を超えた問題として、不當に神秘化することを免れなかつた。そこに私に前に云つたやうに、スコラの考へ方に對する彼の嚴しい批評にもかかはらず、彼がなほその根本においてスコラ的な物の觀方を、すなはちスコラ哲學をあのやうに煩瑣ならしめたその根本的原因を、云ひかへれば、自己自身の事實を離れた我的支配を、脱却しつくすことができなかった所以のものがあるのである。

三、結びと見とほし

斯くてデカルトの哲學はそのそもそもの始めから、彼自身本來それである事實そのもの（彼の我がそこに絶滅せらるべき、否既に絶滅されてゐる場所そのもの）と、この事實を離れてその永遠を主張する我的作爲と、この兩極の間に、甚だ微妙に動搖しつつ進展する。彼の發見した解析の方法を彼の哲學そのものに適用するなら、それはいはば、右のやうな眼に見えぬ二つの座標に分析することによつてのみ明確に把握され得る一つの曲線である。それをして生命あらしめる力は、どこまでも彼自身本來それである事實そのもの——語の最も徹底した意味における自然の光明——であつた。然るにデカルトは恰も彼に先立つルッターが、直接に彼の存在そのものを制約する神の言葉を、たゞ傳承

の聖書もしくはその新しい解釋を通してのみ聽くことを求めたやうに、もとそれ自身で輝く自然の光明を、たゞ傳統の幾何學またはその新しい解明を介してのみ觀ることを欲した。さうして確かにそれは、恰も聖書のルッターにおけるごとく、自然の光明そのものについての彼の理解をより明晰かつ判明ならしめるために、従つてまたその光明をよりたやすくかつ速かに人の世に傳へるために、この上なく役に立つた。しかし又、聖書そのものがルッターの蹟きの石となつたやうに（「思想」昭和十五年六・七月號の拙稿「キリスト敎の將來」參照）デカルトの蹟きは正に彼の幾何學そのものにあつた（我々東洋人にとつて本來無一物といふその諦念が、更には又我々日本人にとつて國史の精粹がさういふ蹟きの石にならないと誰が云へよう！）。さうして少くとも、一つには彼自身のこの蹟きの結果として、恰もルッターがやがてその最も親しい友と袂を別たなくてはならなかつたやうに、我々のデカルトも亦、「自分よりもたち勝つた多くの精神」の間にありながら、なほ避けがたい彼の孤獨を嘆かなくてはならなかつたのである。

「私は頭腦の非凡な人々に私の意見のどれかをしばしば説明してみるのだが、私の話してゐる間は、彼らも極めて判然と分つてゐるやうに思はれるのに、さて彼らがそれをくりかへすとなると、いつも殆どきまつて、私の意見だとはもはや云ひ得ないほどに彼らはそれを變へてしまふのを私は見てゐるのである。」（「叙説」第六節）

デカルトは彼の讀者に、彼の書いたものをできるだけ多くの時間をかけて注意深く讀んでくれるやうに、機會あるごとに懇請した。しかしながらいはば自己の心の瞳をひらくためのこの注意は、ちやうど肉眼の瞳孔の開閉について彼が認めた興味深い事實（「情念論」第十四參照）と同じやうに、たゞ單に我々の「自由な意志によつて」なされることはできない。デカルト哲學が新しい原理として世の注目を惹けば惹くほど、この哲學を動かした本來の事實は忘れ

られて、たゞ新しい衣裳だけが彼自身として通用するやうになつた。一方當時流行の博學な批評家たちが、この衣裳に包みきれないすべてのものを、「未だ中世の殻を引き摺つてゐる」デカルトの頭腦の曖昧に歸したやうに、他方敬虔で德行すぐれた教師たちは、デカルトの中に神を無視する心情の不逞を見た。哲學史家のいはゆる「獨斷的合理主義者デカルト」はこのやうにして發生した。稚くして新しい科學の尖端に立ち、長ずるにしたがつて彼自身の根柢を約するいのちの事實を主キリストにおいてあれほどに深く體驗したパスカル（一六二三—一六六二）すらも、デカルト哲學の本來の意圖を十分に察しようとはしなかつたのである。我々は以下、主として『省察錄』の各章にそつて、デカルト哲學のかういふ運命を明かにするであらう。それによつてこの章に述べたデカルトの懷疑そのものも、さらに新しい照明を得てくる筈である。

「あとがき」はじめ「くりかへして注意深く」といふデカルト自身の指示にしたがひ『省察錄』の忠實な翻譯を先立てゝ、これと一々對決しつゝ論を進めるつもりだつたが、紙數の都合上、たゞ簡潔を旨としてすべてを書きあらためた上、引用の箇所、譯文の借用、從來のデカルト解釋ないし翻譯に對する折衝その他、一切の詳しい註を省略した。讀者の諒恕を乞ひたい。

—昭和二〇・六・一九—